

# 西側は露-ウクライナ会談を、ブチャの狂気によって壊そうとしている

——ラヴロフ外相

## クレムリン：ブチャの挑発は、ロシアに泥を塗ろうとしたもの

Sputnik International

April 6, 2022

火曜日早朝、ロシア安全保障理事会副議長ドミートリ・メドベージェフは、ブチャの挑発を、「ウクライナのプロパガンダを皮肉に夢想して作ったフェイク」だとして、痛烈に叩いた。

クレムリンの報道官ドミートリ・ペスコフは、ブチャの挑発はロシアに泥を塗ることを狙ったものと言った。火曜日、ペスコフは、モスクワはこの問題に対する偏見のない調査を主張すると強調した。

「我々はロシア側に対する、またロシア軍に対するどんな告発も、根拠がないだけでなく、こうしたものは、うまく辻褄を合わせた、悲しいショーにすぎないと、どこまでも主張する」と彼は言った。

ペスコフによれば、「この出来事の成りゆき全体と、膨大な量のデータ、事実、その他のパラメーターは、明かにこれが、ロシア軍を誹謗せんがための、作り事であることを示している。」このクレムリンの報道官は、このような試みは決して成功することはないだろう、と警告した。

彼はまた、アメリカのジョー・バイデン大統領によるブチャの挑発と、ペンタゴンによる声明が、一致していないことを指摘した。

「我々は、アメリカの高官たちの間に、現在、進行している矛盾に、(あなた方の)注意を喚起する。大統領は何かを戦争犯罪だと呼び、一方、ペンタゴンは、そこには正確な

データがなく、我々はそのような結論を引き出すことはできない、と言っている。私たちは単純にこれらの事実を記録している」と、ペスコフは言った。

彼は続けて、「西側はまったく目や耳を、馬車馬のように閉ざしており、(ブチャの挑発については)何も聞きたがらないのだ」と言った。「不幸なことに、これが現実だ。しかしたとえそうであっても、我々は積極的に我々の立場を貫くつもりだ」と、報道官は強調した。

この問題について、国連安保理の総会を開くことは可能かと問われて、ペスコフは、ロシア外交官たちが、今それを用意していると言った。

「その仕事は続いています。あなたは彼らが、これまでに例のないやり方で、機械が故障するように凶っていることを、知っているでしょう。彼らは我々のイニシアティブを妨害しようとしている。しかし、それにもかかわらず、我々は手を拱いているつもりはない」と、彼は述べた。

ペスコフは加えて、モスクワは再び、国連安保理のメンバーと西側諸国のリーダーに対し、「感情的な考え方をやめなさい、それはどんな根拠もない、ただよく考えて事実を比べてみなさい」と、要求するつもりだと言った。

彼の言うのは、[ブチャの挑発に関し]憎むべき偽造を話し合うときには、これを理解し合う必要があるからだ。

ペスコフはまた、クレムリンは、ウクライナにおけるロシア軍について、ブチャの挑発に似たような、新しいフェイクが生じてても、これを排除はしない、なぜなら、これこそモスクワが、事実と虚構を一貫して区別する理由だからだ、と言った。

「あなた方」は、ロシア防衛省報道官から、ブチャで起こったのと似たような状況を偽造するために、別の修正フィルムを作ることも可能だ、という話を聞いたでしょう。したがって、これは除外できないのです。しかし毎回のよう、我々は、何が真実で、何がフィクションかを、しつこく話し合っています」と、ペスコフは言った。

## ブチャ挑発

日曜日に、ビデオ・フィルムが現れて、死んだ人々の死骸らしいものが、ブチャの市街地に散乱しているのが見えた。ウクライナ政府はロシアを指さしたが、モスクワはこの告発を否定し、ウクライナ軍が、ロシアの部隊がすでにその地域から撤退してから、この都市を砲撃したのだ強調した。

同時に、このビデオの死骸の多くは、白い腕章を着けていて、それはウクライナ部隊の工作によるロシアの徽章かとも思えた。この集団虐殺の報告が現れる前に、ウクライナ警察は、「ロシア部隊の破壊行為と残党の領域を明らかにする」ために、この地域で活動を行っている」と通告した。これは、ブチャの挑発のための、準備作業かとも思わせる行動である。

この展開は、2月24日に、ウラジミール・プーチン大統領の通告した、ウクライナを武装解除し、非ナチ化する、現行の、ロシアの特殊軍事作戦のさなかに起こっている。ロシア防衛省は、この作戦は、ウクライナの軍事インフラだけを目標とするもので、居住する市民に危険はないと強調した。

### [訳者 Greatchain 注]

これは一読して誠実で、真剣に真実を訴える文章である。これが、ごまかしやプロパガンダを狙う文章とは考えられない。その感触に正直であることが、まず求められる。これは、あらゆる断片やエピソードについて言えることで、たとえば、ゼレンスキー大統領が、アゾフ大隊の残虐行為をどう思うか尋ねられ、「彼らはどうしようもないのだ。前にはわが国を防衛してくれていたのだが…」と呟いたのは重要である。これは正式な声明でないから価値がない、と考えるのは間違いである。バイデンの呟いた「私はサタンと言われても平気だ」も同様。そういう所からこそ真実が見えてくる。

しかし、今、西側（と日本）のプロパガンダは、狂気となって、反ロシアを煽り立てている。彼らはこの「ブチャ事件」を、それ見たことかと騒ぎ立て、どれほど彼らの気に入らない、疑惑や矛盾が現れても、彼らは耳を貸そうとしないか、巧妙にごまかすだろう。これは、このような事件が起こったとき、いつも同じで、同じことが起こっている。（「スクリパリ事件」という、小さな事件でもそうだった。）ロシアは常に、悪者でなければならない。では一体、ウクライナという国は、一般に信じられているような、平和で民主的で、一方的な被害者でしかなく、国家的な悪や犯罪など縁のない国なのか…？

この幻想を破るためにも、2014年に起こった「マレーシア旅客機 MH17」の墜落事件についての記事（数例の関連記事の1つ）を読んでみていただきたい。  
<https://www.dcsociety.org/2012/info2012/150803.pdf> あたかも「ブチャ事件」を見ている現在と、全く同じパターンで、歴史が繰り返すように、事が進行していることに驚くだろう。特に「ナチスやネオ・ナチスなどを美化することと戦う決議案」に、アメリカ、ウクライナ、カナダの3国だけが反対した事実を、よく知っておくべきである。ま

た最近、あるスペイン人ジャーナリストによる、ウクライナ・ネオナチの、ロシア兵捕虜に対する、正視できない残虐行為のビデオも出ているという。